

2025年12月4日

報告書

アメリカ学会 2025 年度大会に参加して

作成者：元山仁士郎

2025年11月20日から22日の三日間、アメリカのプエルトリコ・コンベンションセンターで開催されたアメリカ学会（ASA）2025年度大会に参加した。プエルトリコは11月でありながら最高気温が30℃前後と暑く、滞在中は半袖で過ごすことができた。夜間にはスクールのような強い雨が一時的に降ることもあったが、学会参加に影響はなく、全体として快適に過ごせた。会場周辺にはホテルやカジノ、映画館、レストランが立ち並び、同時期には小中高生のバスケットボール大会も開催されていたことから、人々で賑わっており、学会会場は活気を帯びていた。

私は、22日最終日の午前9時45分から11時15分にかけて開催された分科会で研究報告を行った。当該セッションのテーマは「戦後の人種的自由主義：ミシシッピから沖縄まで（Postwar Racial Liberalism from Mississippi to Okinawa）」であり、私のほか、アメリカの大学に所属する加藤慶氏、玉井美香氏、阿部啓氏の計4名が登壇した。司会はスペルマン大学のパトリシア・ヴェンチュラ教授、コメンテーターはカリフォルニア大学デービス校のジュリー・ジー教授が務め、それぞれ専門的かつ建設的なコメントを寄せてくださった。

私の報告は「米国の核作戦計画と沖縄（U.S. Nuclear Operation Plan and Okinawa）」と題し、博士論文の中心部分を基礎に構成したものである。本報告は、従来の研究が当然視してきた沖縄の「軍事的有用性」を、米軍の軍事関連史料に基づき再検討し、その歴史的・戦略的役割をより具体的に捉え直すことを目的とした。また、1972年の沖縄施政権返還に際して核兵器の撤去先がどこであったのかについても、既存の議論には十分に触れられてこなかった観点から新たな分析を加えた。質疑応答では、核作戦計画の策定において科学者がどのような役割を果たしたのかについて質問が寄せられ、史料に示される科学者や軍事専門家の関与事例を紹介しながら回答した。セッション後も、米国核戦略とアジア・太平洋地域の関係性を捉える発展的研究の可能性を指摘したアドバイスもいただくことができた。

セッション後には、国際的な研究者と大学院生を対象としたレセプションにも参加した。ここでは同じ分科会で司会を務めたヴェンチュラ教授をはじめ、多様な背景を持つ研究者や学生と交流することができた。今後の学会や若手研究発展に向けて示唆に富む情報交換の機会を得られた点は非常に有意義であった。

また、報告日前にプエルトリコへ到着したことから、短時間ではあったが世界遺産に指定される旧市街地オールド・サンファンを訪れることができた。植民地時代の城塞や色彩豊かな建物が立ち並ぶ街並みは歴史的魅力に溢れており、学会参加の合間とはいえ貴重な文化的体験となった。市内のバスは無料で便利ではあったが、Google Mapの表示通りに到着する場合もあれば、2時間待っても来ないこともあります、結局のところUberやLyftを併用することが多かった。

最後に、今回のアメリカ学会大会への参加は、日本アメリカ学会の海外渡航奨励金によって実現したものである。国際的な学術交流の場に参加し、研究を深める機会を与えていたいたことに対し、ここに改めて深く感謝申し上げる。今回得られた経験とフィードバックを生かし、今後の研究を一層発展させていきたい。



(写真 1) セッションの様子 (2025 年 11 月 22 日)



(写真 2) 現地参加の発表者とともに (2025 年 11 月 22 日)